

千西一遇

特別 特集号

発行2018年2月21日(水)
 上田西高校新聞委員会
 編集局長 下形亮人
 編集局員：望月かれん、児平茉耶、
 下谷梓、小松鈴音、奈良本梓、召田
 りん花、羽毛田莉歩、小平友香、宮
 尾歩果、坂元愛梨

偏西風関東を直撃

サッカー部の快進撃 長野県のサッカー史変える



上田西 - 京都橘 PKを決めた大久保龍成(写真中央)を祝福するチームメイト(29番 篠原希一 18番 田中悟 写真奥 田島遼介) 上田西は全国大会初得点を記録した。撮影=奈良本梓

◆偏西風・・・偏西風は亜熱帯高圧帯から亜寒帯低圧帯に吹く卓越風。北緯・南緯30度から65度あたりの上空に見られ、対流圏界面付近で風速が最大となり冬にはジェット気流と呼ばれる。偏西風波動という南北に蛇行する風は赤道と極の温度差が大きくなる時に現れる。季節によって偏西風域は移動する。(児平茉耶)

開会式で全国大会出場を実感 上原「早く試合がしたい」

2017年12月30日(土)に第96回全国高校サッカー選手権の開会式が駒沢陸上競技場で行われ、全国4093校の中から勝ち上がった48校が参加した。

開会式の直後、上田西のサッカー部14番FWの上原賢太郎を直撃。まずは開会式に出てみての感想を聞くと「改めて全国に来たのだと実感し、早く試合をしたい気持ちになった」と話してくれた。次に初戦の相手である京都橘高校の選手達については「高校サッカー界でも有名な学校なので、雰囲気やインパクトがすごくあった」とした上で「引いては行かないので自分達らしくやる」と初戦への意気込みを力強く語った。

また、サッカー部は12月

第96回全国高等学校サッカー選手権大会に出場した上田西高校サッカー部は快進撃を続け見事全国3位という結果を残し、長野県のサッカー史に新たなページを刻んだ。今回の特別特集号では大会を振り返るとともに歴史を変えた選手達の県予選後から大会中までの様子をまとめた。また一部の選手については将来の展望も聞いた。

下旬より現地入りし、「ユニフォームの調子については1週間前開会式の待機中も盛り上がるなど、モチベーションが上がった」と語った。試合に向けての調整は順調にできている様子がかげえた。

(奈良本梓・小平友香)

練習環境

白尾秀人監督は、サッカー部の練習環境について「上田西高校のグラウンドを人工芝にした」と話した。理由として「地面が柔らかく怪我の予防につながる。また、強豪校とのトレーニング環境の差を埋め、選手のモチベーションを上げたい」と語った。

全国の名門私立高校は人工芝が主流となっており、対戦した帝京大学可児高校、及び明秀日



新調したユニフォームを着用する選手達 撮影=奈良本梓(駒沢陸上競技場)

土のグラウンドでひたむきに練習

白尾監督「グラウンドを人工芝にできたら」

立高校、更には上田西高校以外の全国大会ベスト4進出校は全て人工芝だという。もちろん土だから悪い、人工芝だから良いというわけではなく、メリット、デメリットは様々挙げられる。選手達からも「土でやってきたからこそできたプレーもある」という話もあった。白尾監督は「土という環境で選手達が練習したことにより、バウンドが変

わたりするイメージを掴むことができた。しかし、本番と同じ環境で練習しないと上手にならない」と土で培った練習での成果が発揮された大会を振り返る一方で、人工芝のグラウンドから得られるであろうメリットは、今後のステップアップを考えると重要な点であることを改めて語った。

「一つ勝つと環境が変わる」と話してきた指揮官の思いは叶うか。今後、上田西高校サッカー部の練習環境がどのようになるのかに注目が集まる。

(小松鈴音)

アンプロから新ユニフォームデザインは白尾監督

地域の方々からの寄付金で実現

12年ぶり2度目の全国大会出場に合わせてサッカー部のユニフォームが新しくなった。選手達の話によると、新しいユニフォームはすべて白尾秀人監督が考えたそうで、ブランドもアンプロからブーマーに変わり、デザインも12年前のものに似せたようだ。ユニフォーム変更について、選手たちから様々な意見が出た。MF宮下廉は「今までのユニフォームは背から着ているもので自分では好きだったけど、サイズが大きくて試合中に相手に引っぱられることがあった」とし、「ユニフォームを変えるには県優勝しなければいけなかったのが新しくなってきたのでうれしかった」と話した。FW根本凌は「地域の方々からの寄付金で購入したユニフォームなので大事に使いたい」と語った。FW上原賢太郎は「アンプロは先輩たちが着ていて試合中に相手に引っぱられることがあった」と話した。選手権県予選まで使用していた黄色と水色の縦縞のユニフォームはかなりボロボロになっていた。白尾監督と渡邊総監督とで話し合いがもたれた。渡邊総監督の「全国出たし、新しいもの作りたいね」「自分で作ってみたい」という提案に白尾監督は「やっぱり黄色は変えたくない」と話したそうだ。

(下谷梓)

は試合前にコンテストで決定する。上田西の選手が黄色のユニフォームを着続けることができたら、それはコンテストで勝つ続けることができたことが原因であった。

12年前に監督としてチームを指揮し、全国大会に出場した渡邊善和総監督にも話を聞いた。渡邊総監督はサッカー部のユニフォームのルーツについて、「黄色のユニフォームの始まりはチームが県大会に行くようになって選手からの希望で新しく黄色・青・黄色」というのを選手が自分たちで作った時から」と話す。さらに、「それからずっと黄色が伝統になり、全部真っ黄色の時もあった」と続けた。選手権県予選まで使用していた黄色と水色の縦縞のユニフォームはかなりボロボロになっていた。白尾監督と渡邊総監督とで話し合いがもたれた。渡邊総監督の「全国出たし、新しいもの作りたいね」「自分で作ってみたい」という提案に白尾監督は「やっぱり黄色は変えたくない」と話したそうだ。

頼れる主将

上田西サッカー部を全国3位に導いたキャプテン大久保龍成は、父の勧めで小学1年生から、上田エンシェンでサッカーを始めた。それから12年。大久保の姿は全国大会でのピッチの上にあった。

初戦の京都橘戦。技術に勝る相手の猛攻に耐え、カウンターからPKを獲得すると、大久保は迷わず自らボールをセッティング。上田西にとって歴史的1点となったこのPKについて「全員で繋いだボールのおかげ

歴史的1点は「全員で繋いだ結果」

でPKを獲得した。自分が蹴ったボールだがチーム全体の得点だ」と話した。

続く帝京大可児戦では抜群の統率力で、DFラインをコントロール。ゴール前では身体を張り、5対0の大勝に貢献した。今大会自身2点目となった明秀日立戦でのPKについては、「京都橘戦同様強い気持ちで蹴った。コースは読まれていたが気持ちで押し込んだ」と当時の心境を語った。

そして憧れの埼玉スタジアムで挑んだ前

橋育英戦。試合前に「選手全員が真正面から戦おう」と話し、その言葉通り、優勝候補筆頭のチームに真っ向勝負を挑んだが、結果は1対6の大敗。彼は試合後涙を流した。「チームを勝たせることが出来なかった自分に不甲斐なさが残る」と胸の内を語った。しかしながら、大会を通じて後ろからチームを鼓舞し、身体を投げ出しシニョットを防ぎ、チームを牽引した姿は、我々のなかに強く印象に残っている。

また、彼は共に健闘を称えるという思いを込め、勝利した試合後に泣き崩れる相手選手に手を差し伸べてきた。その行為について「対戦相手とは言えどもサッカーをする仲間」と話した。そんな、相手にも敬意をもって接し「正々堂々」を体現する大久保は、卒業後上武大学に進学する。これまでそばで支え続けた両親に向けて「全国で培ったものを大学でも生かして頑張ります」と次なる目標を掲げた。(望月かれん)

魂のダイブエンダー



←上田西・前橋育英 DFラインを統率する大久保(写真手前から金井春樹、田辺岳大、大久保龍成、岡崎竜斗) 撮影=坂元愛梨



PKで2得点



↑上田西・明秀日立 選手権初めての失点を喫したが、大久保のPKによる得点ですぐに同点に追いつく。撮影=奈良本梓



←上田西・京都橘 途中交代で入ったFW田中悟が倒され獲得したPKのチャンスを見事ものにし歴史的ゴールを決める大久保。上田西高校は選手権初得点、初勝利を飾った。撮影=奈良本梓

▲チームを牽引し全国3位に導いた大久保龍成 写真提供=ファインピクサー

◆大久保龍成 DF 173cm
65歳 上田第四中学校出身 上田エンシェン
シヤン 松岡修造よりも吠え、キャプテンとして体を張ってチームを後押しする。3バツクの中央でチームを引き締める守備の柱として活躍。(沼田りん花)

西高の守護神



↑↓前橋育英戦でのビッグセーブの場面。失点は重ねたが前橋育英の猛攻を何度も跳ね返した。
撮影＝坂元愛梨



→ゴール前にとっしりと構え相手の攻撃に備える小山。相手の強烈なシュートには体を投げ出し、ゴールを死守した。
写真撮影＝奈良本梓



◆小山智仁 GK 176cm
70kg 更北中学校出身 A.C長野バルセロU-15 後ろからの鼓舞、的確なコーティングでチームを支える。シュートに対しての反応が早く、上田西の守護神として注目を集めている。(宮尾歩果)

上田西の12年ぶりの優勝で幕を閉じた選手権長野県予選。本戦出場を決めてから上田西は強豪校との練習試合を盛んに行った。大久保キャプテンによると

「(全国レベルを相手に)あまり調子が出なくて上田西のサッカーができて、自信を無くした日もあった」という。だが、皆で励まし合って、まず全国で一勝しようという気持ちで強く持ち、乗り越えた。首都圏で行われた第96回全国高校サッカー選手権大会に上田西は2回戦から登場し、初戦は強豪である京都橘を、見事1対0で下した。続く3回戦帝京大可児戦では5対0で快勝。準々決勝では明秀日立と一進一退の攻防戦を繰り広げるも、3対2で競り勝ち、長野県勢初のベスト4進出を決めた。そして準決勝。埼玉スタジアム2002で行われた前橋育英戦では大きな力の差を見せつけられ、1対6で惜しくも決勝への切符を掴めなかったが、上田西が掲げる「正々堂々」「全盲攻撃・全盲守備」がどの試合でも十二分に見られた。初戦、3回戦と強豪を相手にしながらも、先制点を取ったのは上田西だ。そして両試合とも無失点で終わっている。準々決勝、準決勝では失点を喫したものの、準々決勝は勝利し、準決勝では前橋育英から唯一の得点を奪った。

個人の能力底上げ必要 来年は前橋育英を無失点で抑えられるようなキーパーに

備をする。帝京大可児戦まで相手に攻め込まれてもゴールを許すことは決してなかった。そんな上田西の守護神小山は全国大会での試合を振り返って「全国のレベルは非常に高くて無失点で終えた試合は2試合しかなかったけど、1試合ごと自分が成長していくのが分かった」「とてもいい大会になった」と述べた。各試合の守備については「前橋育英戦で6失点してしまった。そこでレベルの差の大きな違いを感じた」「個人の能力が上がっていかないとダメだなと思った」と優勝校となった前橋育英と戦ってみての、これからの西高の課題についても話してくれた。またその前橋育英については「前橋育英とはトレーニングマッチを何回かやらせて頂いたが、Aチームと戦うのは全国の準決勝が初めてだった」とし、「Jリーグ内定者もいたのでレベルが違った。自分が今できるプレーはできたけど、それでも全然追いつかなかったの」と悔しそうに語った。新チームの副キャプテンに就任した小山は、「今年1年以前橋育英を0で止められるようなキーパーになりたい」と来年に向け、悔しさがにじみ出た強い抱負を語ってくれた。そして引退する3年生に一言お願いすると「3年生ともう少しサッカーをしたかったけれど、もう終わってしまった。とても悲しいけれど、新3年、2年と来入ってくる1年生でまた全国の舞台で今年以上の結果を残せるように、今の3年生に恥じないような結果を残したい」と意気込みを語った。
(下谷梓)

試合は重なるが、自分の成長と実感

エースFW覚醒 挨拶代わりにの

これが 全日本 本 だ

→上田西・帝京大可見 選手権自身初得点を決め喜ぶ根本、1点目、2点目、3点目 撮影||宮尾歩果



1点目 (帝京大可見戦)
前半の1点リードの流れに乗り追加点を挙げたい上田西は後半開始1分、FW田島の右サイドの突破からのクロスボールを根本がヘディングで合わせて追加点を取った。



2点目 (帝京大可見戦)
チャンスをしっかりと得点に繋げ4点の差をつける中、後半開始27分、根本は相手の前に浮いていた処理のしにくいボールを奪い、その勢いのまま左足でファーサイドに流し込み見事ゴールを決めた。



3点目 (前橋育英戦)
ここまで無失点で相手を抑えてきた前橋育英高校。その堅い守備を打ち破り、見事に1点を奪い取ったのは前半20分。中盤でボールをキープしたFW上原が、根本へラストパス。ディフェンダーの股を抜く技ありゴールが決まった。

◆根本 凌
FW 183cm 75kg
神奈川県立赤羽中学校
出身 シュートジュニア
ユースFC 高身長が特徴だが、足元がありポテンシャルが高い。鹿屋体育大学への進学が決まっており、大学サッカーでの活躍も期待される。
(坂元愛梨)

上田西高校サッカー部でエースナンバーの10番を背負い、自身の武器である体格とスタミナを生かし試合中走り続け、攻撃の基点となりチームのために点を取ってきたFW根本凌。彼の活躍は長野県に勇気と感動をもたらした。そんな根本のサッカーのルーツを探るとともに今回の選手権を振り返ってもらった。
根本がサッカーを始めたのは小学校3年生。当時はFWではなく、攻撃も守備もこなさなければならぬポランチだったという。中学に上がり、ハーフの中でもタツ

頭で 足で 股抜きで

選手権得点ランキング
1位:7得点 飯島 陸 (前橋育英)
2位:3得点 根本 凌 (上田西) 佐藤 一輝 (仙台育英) 荒井 慧伊大 (明秀日立) 菊池 泰智 (流経大柏) 加藤 蓮 (流経大柏) 久住 玲以 (日本文理) 菊井 悠介 (大阪桐蔭) 安藤 瑞希 (長崎総科大附) 佐藤 颯汰 (日章学園)

目指すは「ユニバーシアード日本代表」

最後に、根本にとってサッカーとは「夢があり、人を笑顔にできるスポーツ。自分にとっての生きがい」という。来期以降の上田西に根本のようなエースが誕生することが大いに期待される。
(小松鈴音)

チラインに近い位置を自分のポジションとし、ライン際で勝負することが多いサイドハーフに転向。中学3年生からFWになり、高校でも希望したが、始めは動き方や体の使い方が分からず、先生やコーチに教えてもらいながら練習していたそうだ。
これまでの様々なポジションでの経験や地道な努力の積み重ねが、県大会から無失点で勝ち進んでいた前橋育英から唯一得点を奪い、全国で34人のみが選ばれる大会優秀選手への選出に繋がったと言えるだろう。優秀選手に選ばれたことについて根本は「優秀選手の中に入れたのは心から嬉しい」と喜びの気持ちを述べた。また「優秀選手に選ばれることはそんなに狙ってなかった。このチームの皆ともしっかりサッカーをしたいという気持ちの方が強かった」とも語った。優秀選手の中から選ばれる高校選抜の選考会の参加に惜しくも入れなかったことについては、「選考会の枠から外れてしまい悔しい気持ちも多分あって、全国ベスト4という結果に満足はしていない。白尾監督のように、大学でもユニバーシアードという上のカテゴリーで選抜があるので、そこに選ばれるように頑張りたい」と大学進学後の意気込みについて熱く語った。
そんな根本の憧れの選手は、Jリーグ川崎フロンターレの小林悠選手。大事な時に点を取り、チームを救うことができ、常にチームのために走っている姿に憧れたそうだ。
最後に、根本は「サッカーは夢があり、人を笑顔にできるスポーツ。自分にとっての生きがい」という。来期以降の上田西に根本のようなエースが誕生することが大いに期待される。
(小松鈴音)

更なる高みを目指して

飛び道具 炸裂



上田西 - 前橋育英 ロングスローを放つ田嶋。今大会ではこのロングスローから数多くのチャンスを出した。 写真提供=ファインピクサー

今大会の上田西高校の攻撃で相手チームに脅威を与え続けたのがセットプレーだ。選手権県予選の準々決勝から決勝までの5得点のうち実に4点がセットプレーからの得点であったことから、編集部は全国大会への展望としてセットプレーに注目していた。ここではセットプレーで相手チームに脅威を与えた選手の紹介をする。

田嶋

驚異のスローイン

コート外から相手ゴールを脅かす

西高生の心を高揚させた。帝京大可児戦で前半36分にF

W田嶋遼介が投げたロングスローは敵に阻まれることなく

相手ゴールに見事に吸い込まれた。相手側もこれほどのロングスローは見たことがなかっただろう。だれも触れずにゴールを割ったとして得点は認められなかったが、西高生の記憶に残るプレーとなった。今大会の活躍を考えると、田嶋の代名詞といえるロングスローと言っても過言ではないであろう。それくらいのインパクトを彼は全国に残した。

明秀日立戦ではこのロングスローから決勝点である3点が決まった。試合後のインタビューで、田嶋は「練習の時からロングスローから根本がずらして中にいる人が合わせるという形の練習をしていたので練習通りだった」と話した。このロングスローは、どうやって身につけたのだろうか。田嶋は「投げたら、という感じなので特に練習はしていません。ただ中学の頃から飛ばしていた」と飄々と答えた。

自身は今大会、帝京大可児戦で2アシストを記録し、おおいにチームの勝利に貢献した。ゴールを決めることはできなかったが、「ゴールが一番決めたかったけど、アシストできてよかった。プラスに思っている」と前向きな発言を残した。またサッカー部を引退することについては「ホテルで寂しいと感じたが、3位という結果は胸を張って堂々といえるような結果です。満足しています」と述べ、サッカー部を引き継ぐ後輩に向けて「自分たち以上に努力をして、自分たち以上の結果を出して欲しい」というメッセージを残した。(下形亮介)

丸山

FK 攻撃の起点に

正確なフリースキックが相手ゴールを脅かす

正確なキックは西高の武器として大いに活躍し、相手チームに脅威を与えた。M丸山圭太は帝京大可児戦で会場全体を圧倒させた40m先のフリーキックでのシュートを決めた。風を利用したとはいえそう簡単に決まるようなシュートではないだろう。

明秀日立戦でもチャンスを出す。右サイド敵陣奥深くからのフリーキックのチャンスを得ると、丸山はペナルティエリア内の味方に向けて正確なクロス上げる。最後はF新田太一が頭で合わせた。ボールはゴールラインを割ったかと思われたが先にファールをとられ、得点は認められなかった。

本人は「部活での練習が終わった後、毎日自主練習をしてキック精度を身につけた」と話した。我々の記憶にも深く刻まれたシュートは、3年間の練習で培った技術が凝縮されたものであった。



上田西 - 明秀日立 丸山圭太のFKはぐんぐん伸びて相手ゴールに迫る。2試合連続ゴールかと思われたがクロスバーに阻まれた。 撮影=坂元愛梨

2度目のチャンスは帝京大可児戦での位置とほぼ同じ位置からのフリーキックとなった。ここでは丸山は直接ゴールを狙う。ボールはぐんぐん伸びてゴールかと思われたが惜しくもクロスバーに当たり点を決めることができなかった。あのゴールへと真っ直ぐ

準決勝での前橋育英戦では惜しくも破れてしまったが大々でもサッカーを続ける丸山は前橋育英について「全てが上回っていて戦っていて勝て

る気がしなかった。すごく勉強になったから大学で活かしていきたい」と語った。なぜ悪天候でも上田西は点が取れるのかという質問には「走り込みで足腰が鍛えられていて相手に走り負けしないキックも飛ぶという所で相手より上をいっていたと思う」と答えた。最後に3年間彼を支えてきた保護者への思いを聞くと、「食事や送迎などでお世話になり保護者のお陰で全国までこれた」と感謝の気持ちを書いた。生徒一丸となって応援をした西高生に向けては「県大会からいろんな応援メッセージを頂き皆さんのお陰でここまで来ることができたので感謝しています」と話した。



正確なキックで多くのチャンスを出した丸山圭太(写真右)と宮下廉(写真左) 宮下は準々決勝の明秀日立戦で勝ち越しのゴールを決めるなど活躍した。また2人とも「全員守備」を徹底し、上田西の中盤を引き締めた。全国大会では、それぞれ1得点ずつを記録しチームの勝利に貢献した。 撮影=奈良本梓(写真左) 坂元愛梨(写真右)

引退することについては「来年も県制覇して自分たちの記録を超えてほしい」と西高サッカー部の更なる飛躍に向けて後輩達にエールを送った。(羽毛田莉歩)

冴える白尾采配

上田西 真田軍のような活躍

大会前に真田神社に絵馬を奉納 真田家の魂、西高サッカー部に乗り移る

第96回全国高校サッカー選手権大会において、上田西高校サッカー部は京都府立高等学校に1対0、帝京大学付属高等学校に5対0、明秀学園日立高等学校に3対2という点

数で見事に準々決勝まで勝ち進んだ。惜しくも準決勝では前橋育英高等学校に1対6というスコアで負けてしまったが長野県勢初のベスト4進出を果たし、私たちの心を躍ら

せた。今まで全国大会を勝ち残り、学校名を世に知らしめることが難しかったが故に、今回の上田西サッカー部の存在は、完全にダークホースであった。

県予選から選手権の準決勝まで無失点で迎えた強豪前橋育英から1点を奪ったことからも上田西サッカー部の強さが垣間見ることができた。ここまで勝ち進むことができた

のは、やはり白尾秀人監督率いる上田西サッカー部が掲げる「全員プレー」が鍵となっていたのだろう。試合に出ている選手はもろろの事、出られなかった選手も大声での声援を送ったり試合に出ている選手にマッサージをしたりと、チーム一丸となって戦っていた姿が随所に見られた。

選手権大会前には地元の方や美術部の工藤菜奈さんの協力のもと完成した大型の絵馬を真田神社に奉納した。約1週間での絵馬を制作したという工藤菜奈さんは「狼を描いたのは2018年が成年ということだったのでそれに関連させた。またオオカミは日本でも神の使いと言われ、ヨーロッパでは最強の動物ともいわれており、自分たちは最強だぞ、力強いぞという気持ちをもって戦いに挑んでほしい」と絵馬についてコメントした。

真田神社には、信州上田に築かれた上田城がなかなか落とされない粘り強さがあったことから必勝祈願に訪れる人が多い。ではなぜ上田城は落とされなかったのか。それは真田昌幸という武将の戦略にあった。築城の際に昌幸が考えたのは攻めにくく守りやす

いという事。実際上田城は2回も徳川の軍に攻められたが、これを退けている。第一次上田合戦では真田の戦力は約2000、一方徳川は約7

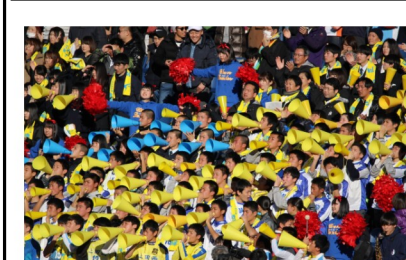
800であったにも関わらず、真田軍の犠牲者は40人程度なのにに対し徳川軍は約13000の犠牲者が出たという。(諸説あり)昌幸はバラバラに軍を配備し、直前まで身を潜め一気に「全員で攻める」戦略をとり、見事に徳川の軍勢に勝利した。この戦い方は今回の上田西サッカー部の「全員サッカー」と似ている。全員で守り攻撃の隙をいつも見計らい、こそこのときに攻めかかる。まさに白尾監督が真田昌幸となつたような戦いであつた。

勝負所での白尾采配も冴えた。京都府立で投入した田中悟が獲得したPKが試合を決めた。帝京大付属戦では強風を利用するために試合開始早々に口



真田神社に絵馬を奉納した際のサッカー部の様子 撮影＝下谷梓

真田神社には、信州上田に築かれた上田城がなかなか落とされない粘り強さがあったことから必勝祈願に訪れる人が多い。ではなぜ上田城は落とされなかったのか。それは真田昌幸という武将の戦略にあった。築城の際に昌幸が考えたのは攻めにくく守りやす



埼玉スタジアムでのスタンドの様子。吹奏楽部、チアリーダー部をはじめとする多くに生徒が応援に訪れ、ピッチ上の選手達に大きな声援を送った。撮影＝奈良本梓

2試合だけではないが今大会の応援には多くの生徒が駆け付けた。スタンドのサッカー部、応援に駆け付けた生徒を束ね、西高を盛り上げる応援団長が2人いた。清水詩音と森山蓮だ。応援時に工夫していることについて清水は「できるだけ来てくれる全員に分かちやすいように分かつた曲を歌っています。例えば野球部が来てくれた3回戦からは野球部が知っている曲をできるだけ多くやりました」と話す。森山は「吹部やチア部とかが来ているので、この曲を何回お願いします」と伝えた」と語った。西高の応援は駆け付けた全員が困らないように2人の応援隊長によって工夫されていた。

次にとの試合でも頻りに演奏された「魔曲」アルプ

又一万尺について聞いてみた。この曲がかかると西高の応援席がとも盛り上がり、選手たちは勢いづく。そして、なにかが起る。このアルプス一万尺のタイミングについて清水は「盛り上げるとき、テンションを上げたいときに使う曲」とし、森山は「自分たちの点が入った時にその勢いでもう1点行こうとか、自分たちの流れにしようという時にチヨイスする。あとは相手に点を決められた後とかに相手に勢いを持っていかないようにやっている」と述べた。

また今大会話題になった「○○よりそば」の応援については「2人でその土地の名物とかを調べて応援で使った」と話した。初戦の京都府立戦では京都と言え

援団長 語る

選手を支えた大応援団 応援にも様々な工夫

清水詩音「なるべくわかりやすい曲を」
森山蓮「吹奏楽、チアと連携とった」



真田神社での記念撮影 撮影＝望月かれん

勝負所での白尾采配も冴えた。京都府立で投入した田中悟が獲得したPKが試合を決めた。帝京大付属戦では強風を利用するために試合開始早々に口

今大会の快進撃は、真田神社の神様が上田西サッカー部に微笑んだ結果とも言えよう。真田氏の加護を受けたことからの上田西サッカー部の活躍から目が離せない。(下谷梓)



編集局のツイッターのアカウントはこのQRコードを読み取ることで簡単にフォローできます。ツイッターのプロフィール画面の右下から取ってもらおうとスムーズです。



試合中、選手に指示を送る白尾監督。常にコートサイドに立ち戦局を見ながら指示を送る姿が印象的であった。撮影＝奈良本梓

先日、高校サッカー選手権大会では多くの写真を撮影したものの新聞の記事となる写真は少数だった。記事にならなかった写真をツイッターで発信していく予定だ。また、2月23日(金)より高校サッカー選手権の西高生の活躍を写した写真が上田のアリオ2階星のコートで公開される。ここには編集局員が撮影した写真も展示される。

編集局ツイッター運用開始

上田西高校新聞委員会編集局はこのツイッターにアカウントを開き、情報発信を行う。西高生の活躍を発信することが目的だということだ。新聞委員会顧問の山浦先生は「活躍する西高生の様子をいろんな方に見てもらいたい」と話した。現在ツイッターには西高の公式アカウントも存在しているが、うまくすみわけを行いながら情報発信をしていく。